

## 『大切な人』

私は母が好きだ。一番大切な人は誰かと問われたら、迷いなく母だと答える。身内自慢になり恐縮だが、母のことを、何歳になっても美しく、情が深く、心がまっすぐで、志が高く、努力を惜みず、ユーモアのセンスもあり、魅力に溢れた人だと思っている。

本執筆を依頼された際、「自分の好きな事を自由に語って欲しい」とのことだった。私が語りたことと言ったら何だろうか、お酒の話だろうか、飼っている犬の話だろうかと逡巡した結果、折角なので何よりも大切な存在である母の話にしようと思い至った次第だ。

私自身の半生を振り返ると、癖があって協調性に乏しく孤立しがちだった私は、これまで、母を散々怒らせたり泣かせたりはしてきたが、母を笑顔に出来た記憶は殆どない。父が単身赴任の中、母は仕事、子ども達と犬の世話、家事全般、祖父母の介護を一人でこなしていたうえ、全てにおいて完璧を目指す性格から、非常に多忙な毎日を送っていた。子ども達の些細な変化や小さな悩みから、友人関係や趣味嗜好まで、よく把握しようと努めてくれていた母だったが、母自身、精神的に余裕などなかったに違いない。

今でこそ母を敬愛しているが、当時は子ども達にも完璧を求めるが故に厳しく、自分の理想を掲げてヒステリーを起こす母とぶつかるのは大概私で、反発したり距離を置いたりしていた。一方で、母に愛されたい、褒められたいという想いも強く、趣味や好きなもの等は母の真似をし、進路や就職は母の願望を叶えてきた。しかし、普段は問題児が陰ながら愛される努力をしても、気付いて貰えることも報われることもなく、可愛くお茶目な妹や、優しくのんびり屋の弟の中で、私は自分に自信が持てないまま、最も母と距離があるように感じていた。

大学生、社会人と私自身が成長し、母と私を取り巻く環境が変わっていくにつれ、子どもの頃とは異なる視点から母の姿が見えるようになった。私のことを理解してくれないと思っていたが、私を理解しようと苦慮し、自分自身を責めていた母を知った。母が楽しそうだった習い事や趣味を辞めてしまったのは、家族を優先してくれた結果だった。子ども達への、「自分達の好きな事をして自由に生きなさい」との教養は、母が手放したものと、母の二の舞になって欲しくないとの想いからだった。

母から見た今の私は、「社会的で義理人情に厚い」人間らしい。本当にそのような人間になれたのは定かではないが、母のお陰で今の私があることに感謝し、この先は、母に一番に愛されることを望むのではなく、母が幸せでいられるよう、不安や寂しい思いをしないよう、母が今までに与えてくれたものに対して返していこうと心に誓っている。恩を受けたら恩を返す、見返りを求めず誰かを大切に、これも母が教えてくれたことの一つだろう。

母と私の関係に、共感し難い人もいるかもしれないが、母娘の在り方はいくつあっても良いと思っている。少なくとも私は、今までの全てを引っ括めて、母の娘で本当に幸せだ。いくら想っても足りない「ありがとう」と「大好き」を、この先も私なりの形で伝えていきたい。

あなたにも、大切な人はいるだろうか。その人は、あなたにとってどのような人だろうか。秋の夜長に、この独り言が大切な人を思い浮かべる契機になれば幸甚だ。

(Y. 0)